

洛北のカキツバタ群生地

中 沢 信 午

カキツバタを水草というべきかどうか論議もあろうが、ここに紹介するカキツバタは水と関係が深い。

実は京都洛北の花背峠を越えて、さらに北へ10kmほど行くと、山にかこまれた、やや広い地帯に出る。ここが広河原で、その入口が杓子屋町、そしてそこに杜若(かきつばた)という名前のバス停があり、さらにその近くに杜若という名字の家がある。この家の庭の道路沿いにカキツバタが群生している。10×16mの長方形の池の中の、目測で4×15mほどの区域に、ざっと見て数千本のカキツバタであるから、さしたる大群生地ではないが、私がここに紹介する理由は、一つのエピソードがあるからにはかならない。

この群生カキツバタは、昔第55代の文徳天皇の第一皇子惟喬親王(844-897)御手植のカキツバタの子孫といわれている。

当時、皇位継承をめぐる藤原氏と紀氏との争いに無常を感じた惟喬親王は、出家して洛北の山深く落ちのび、今日遺跡はあちこちに点在するが、その一つがここ広河原である。親王はこの地方にクロロを使う木工芸、特に碗(わん)や杓子(しゃくし)を造る方法を伝授したことから、杓子屋町の地名が生まれたという。

そうした親王が、平安御所の庭から持参したカキツバタをこの場所に植え、その花をめでたといわれる。また伊勢物語や謡曲「杜若」の中にカキツバタの段があるのも、主人公在原業平が惟喬親王の友人であったからだという。

このカキツバタ群生地を昔から守りつづけて今日に至ったのが杜若家で、現在の主人は杜若安三氏である。池の中ほどに古くから平安御所にある白雲弁財天を祭る小さな社殿があるが、それは群生するカキツバタの生育を妨げないように配慮して造られている。

群生地は浅い池で、絶えず清水がわき出して外へ流れ出るようになっている。それゆえ、冬もめったに凍ることがなく、カキツバタの花は初夏の最盛期を過ぎても咲きつづけ、温暖な年には冬もお咲く。実際に冬の二月に咲いたカキツバタに雪がつもった写真も、当家のアルバムに保存されている。

このカキツバタ群生地を主題として、神戸の岡田美代の台本で今岡頌子による舞踊「雪の杜若」が東京で公演

されたのは1979年であった。

そうしたカキツバタ群生地であるから、今後も永くこれを保存したいものである。しかし、もしもこの群生地が渇水すれば保存は困難におちいる。そして、それはありうる。第一にすぐそばを北上する道路は日本海岸の小浜市へ通じるので、今後は自動車の交通量が増える予想され、交通公害による地下水路の妨害は当然おこる。また京都の観光地域がしだいに北へ広がってくると、この辺も人口が増加し、都市化によって渇水はやって来るであろう。開発と自然保護とのジレンマが、ここにもある。

(山形大学名誉教授)

細 満 江 紅

斉 藤 吉 永

昨年(1984)春と秋の2回我孫子市に住む友人の小畑氏が親交のある中国人の勤務する杭州植物園を中心として約2ヶ月近くを歩いて帰国後に私を尋ねてきて土産話をしてくれた。

私も8月に1年ぶりに河北省に出掛けたので中国の南北の植物の話題がつきなかった。

私は北京郊外でオニバス *Euryale ferox* Salisb. の群生地を見たことを告げたが小畑氏は現在中国で「細満江紅」を利用して水稻の多収穫を計って好成績をあげていることを聞いてきたという。始めはベトナムで水田に応用していたのが中国にも広まったのだときいたが繁殖力が強いので豚の飼料にもしてこれ結果は良いと自慢していたと話す。

小畑氏は「私は樹木やラン科植物は少し判るがシダ植



〔写真〕オニバス群落(中国, 北京郊外 1984. 8. 19)